

# 1人1台タブレット端末活用を目指した 英語アクティブ・ラーニングサイトの開発と普及

横田 梓（千葉大学教育学部附属中学校）

概要：今日の英語教育においては、アクティブ・ラーニングを通して語彙や文法の知識を実際のコミュニケーションに活用できる力へと引き上げて育成する教材が求められている。発表者の勤務校では、2014年より生徒各自が1台ずつタブレット端末を所有し、授業で活用している。本研究では、英語力だけでなく思考力・判断力・表現力を育成するために、タブレット端末を活用する多様なICT教材開発とその普及を目指し、(1)アクティブ・ラーニングの充実に寄与する課題解決型の英語ICT教材を開発すること、(2)「英語アクティブ・ラーニングサイト」を立ち上げ、作成したICT教材とその実践事例を公開すること、の2点を行う。

キーワード：アクティブ・ラーニング、タブレット端末、課題解決型学習、DDL

## 1 はじめに

グローバル化が進展する今日の英語教育では、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の育成が重視されている。基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせるのはもちろんのこと、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成が重要な課題となっている。こうした背景をふまえて、アクティブ・ラーニングおよびICT活用の推進が急務となっている。本研究は、こうした時代のニーズに即して、タブレット端末を活用する多様なICT教材の開発とその普及を目指すものである。

## 2 研究の方法

### (1) 調査対象および調査時期

本研究では、中学1～3年生の英語学習に寄与するICT教材の開発を行う。これまでの取り組みとして、2014年度に中学3年生用、2015年度に中学1年生用の教材を作成し、授業で実践してきた。今年度は、中学2年生用のICT教材を作成・実践するとともに、この3年間で開発してきた教材を公開する「英語アクティブ・ラー

ニングサイト」をWeb上に開設し、教材のシェアや意見交換を行う交流の場を創る。

研究計画としては、12月までに校内無線ネットワーク上のシステム構築とWebページのデザインを行いながら教材開発を進め、同時に開発した教材の実践と分析を行う。2017年2月に勤務校において行われるICT授業研究会では、開発した教材や実践事例の公開を予定している。3月までに教材の修正を行い、作成したICT教材・ワークシート・実際の指導事例・生徒の作品等をホームページ上で公開し、自由に閲覧・ダウンロードできるようにする。こちらから発信するだけでなく、新たな実践例や改善すべき点などをサイトに投稿してもらうことで、タブレットを介して交流の場を創造し、双方向の学びのつながりを生み出すことも本研究のねらいである。

### (2) アクティブ・ラーニングへの志向性

本研究で開発するICT教材は、アクティブ・ラーニングを志向する課題解決型教材が特色である。生徒には、単元のはじめに最終ゴールを提示し、4技能を通じて「英語を使って何ができ



DDL の効果を検証するために、実践開始前(事前)・実践終了直後(事後)・実践終了1ヶ月後(遅延)の3回にわたって文法テストを行った。図3は不定詞の文法テストの結果を示しているが、DDLを実践した処置群と教師主導型の文法指導を行った対照群との間で、遅延テストにおける得点差が開いたことがわかる。

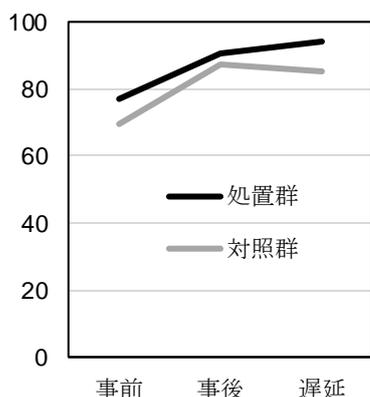


図3 不定詞文法テストの得点の推移

また、修飾語の文法テスト得点の推移(図4)を見ると、DDLを実践した処置群と教師主導型の文法指導を行った対照群のいずれにおいても、事後・遅延テストにおける得点の伸びが確認できたが、その上昇率は特に処置群において大きいことがわかる。

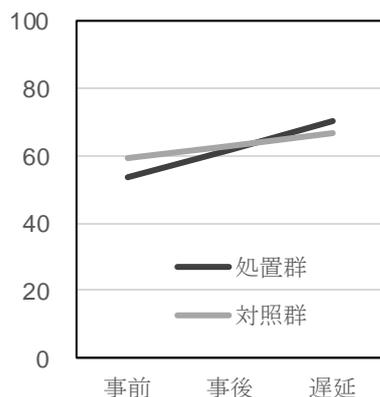


図4 修飾語文法テストの得点の推移

以上の結果から、DDLは文法指導の効果が高いことがわかる。このように、文法指導においてもICTを活用し、生徒が自ら思考するプロセスを大切に、アクティブ・ラーニングを意識した教材づくりを進めている。

#### (4) ICTを活用した課題解決学習の実践例

これまで述べてきたように、本研究の特徴は、文法習得から産出活動までの一連の流れを、協働学習や交流を取り入れながら、ICTを活用した課題解決型タスクで連続させていることにある。この流れをふまえて作成し、授業で実践したICT教材の例を紹介する。

##### 【実践例1】題材名「Where do you live?」

本題材の目標を「英語で道案内をすることができる」とし、自宅までの道順をたずねたり教えたりする課題を設定した。前述したように、アクティブ・ラーニングを目指しつつICT教材の特長を活かした課題解決型タスクとするために、次のような手順で指導を行った。

- ①基本表現を含む音声タブレットで再生して聞き取り、気づいたことを友達と共有する。
- ②学習した基本表現を定着させるため、タブレットに配信された白地図(図5)を用いて道案内のペアワークを行う。タブレットのペン機能を使って、聞き取ったルートを書き込む。
- ③インターネットで自宅周辺の地図を検索し、実在する目印を利用して道案内をする。

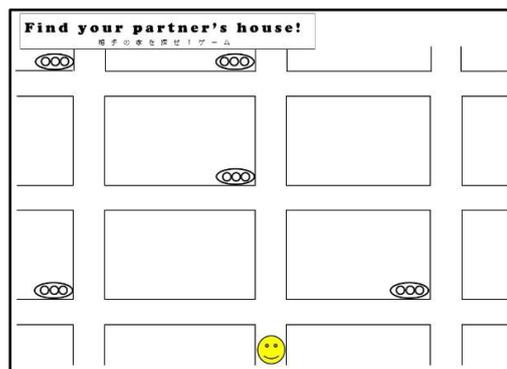


図5 タブレットに配信した白地図

##### 【実践例2】題材名「Where's your favorite place at ○○ Junior High School?」

本題材の目標を「学校のホームページで校内のお気に入りの場所を紹介することができる」とし、タブレットを使ってデジタル版の記事を書くという最終ゴールを設定して、次のような手順で指導した。

- ①活動の最終ゴールを生徒に示し、学習到達目標としてのルーブリックを共有する。
- ②学校内にある自分のお気に入りの場所の写真をタブレットのカメラで撮影する。
- ③自分のお気に入りの場所を友達に紹介するため、PowerPoint でプレゼン資料を作成する。
- ④発表原稿を英文で書く。この時に、既習の語彙や文法をどう活用するか、どうすれば自分の考えを伝える表現になるかを、協働学習の中で互いにアドバイスをしながら考える。
- ⑤スクリーンに写真を映しながらスピーチ発表を行う。聞き手は、タブレット上に一斉配信されたデジタル版ジャッジシートに点数やコメントを入力して相互評価を行う。
- ⑥発表原稿やプレゼンで使った写真をもとにして、学校紹介ホームページのデジタル作品を完成させる（図6）。



図6 完成した生徒作品

### 3 結果と考察

1人1台タブレット端末を活用したICT教材を活用することにより、従来型の英語指導よりも効果が上がったこととしては、生徒の学習意欲の向上、創意工夫やオリジナリティの伸長（PowerPointの工夫・作品制作）、パフォーマンス課題（スピーチ発表・グループ活動）の大幅増などが挙げられる。また、自分で撮影した写真や身近な社会生活につながるテーマなど、

authenticな題材を活用できることもメリットのひとつである。今日の英語教育においては、「聞く・話す・読む・書く」の4技能統合型授業が重視されているが、「英語アクティブ・ラーニングサイト」のICT教材には、4技能がバランスよく配列されていることも補足しておく。

### 4 結論

アクティブ・ラーニング志向の教材開発を行うにあたり、タブレット端末等のICT機器が果たす役割は大きい。本研究で開発する「英語アクティブ・ラーニングサイト」の運用により、文部科学省が目指している2020年代の教育の情報化に向けて、他校の英語教員とも情報を共有していきたい。

### 5 今後の課題

実際のサイトの立ち上げは今年度の後半になる予定であるため、まずはより使いやすいデザインを検討することが課題である。また、本研究のICT教材の有用性や、タブレット端末との相性を確認するための検証も必要となる。

### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費(奨励研究)「教育のスマート化を目指した英語デジタル教材の開発と実践」(課題番号: 26908052)および「1人1台タブレット端末活用を目指した英語アクティブ・ラーニングサイトの開発と普及」(課題番号: 16H00110)の助成を受けたものである。

### 参考文献

- 西垣知佳子・小山義徳・神谷昇・横田梓・西坂高志 (2015). 「データ駆動型学習と Focus on Form—中学生のための帰納的な語彙・文法学習の実践—」 *KATE Journal*, 29, 113-126.
- 横田梓 (2015). 「中学校英語科における『データ駆動型学習』の効果の検証—文法ルールの発見から自己表現へ—」『千葉大学教育学部附属中学校研究紀要』第45集, 35-44.